

## 【総括および展望】

### 「文化ボランティアのこれからについて・・・」

文化ボランティアコーディネーター

大久保 邦子氏.

皆さん、もう何も言うことも聞くことも要らないぐらい満足されたのではないのでしょうか。特に最後の J グループ発表では「資質を高めるには・・・？」というサブテーマでしたが、「最初はちょっといろいろありましたが」という発言、ここは大切なポイントの一つだったと思います。行政とボランティアの関係について必ず出てくる課題です。今日の発言ではそれを乗り越えた素晴らしい活動をされており、とても心地よく伺いました。

私もサブテーマ「誰がボランティア活動を担い続けていくのか？」の C グループに加わりました。各テーブルを回ろうと思っていましたが、話が盛り上がり楽しく、移動することなく最後まで居続けました。このテーマだけでも、ボランティアの真髓が語られたかなという感じがしました。11個のサブテーマがありましたが、きっと底流を流れているものはかなり共通しているのかなあ、と思っています。この C グループのサブテーマは非常に微妙です。一番肝心な事は「誰がボランティアのセッティングをしたのか」、行政が必要だと思ったからか、あるいは社会の要請でやったのか、そういう時この問題が必ず出てきます。

しかしボランティアとは、本来自分たちでテーマを考え自主的にやるわけですから「やるだけやって自分達で楽しんだらきっぱり止める覚悟もできています」と、こんなことを話していると本当にボランティアそのものの活動のありかたを考えるヒントがあったのかな、と思います。

ところが、ボランティアの中には、幸か不幸か、ミュージアムとか文化ホール付きのボランティアは、「行政がやりだした」というところに非常に問題があります。この問題は本当に問題なのか、それを乗り越えて行かねばならないのではないかと、いろいろ考えます。

私も実はスタートの時は、地域活動を初め、ボランティアで子供会やら PTA、街づくりなど数多くやっておりました。その後、国立の女性会館の活動を始めてから「こういう施設の中のボランティアは」と言われたとき「えっ！これってなんだろう」と思いました。いろいろな会合に参加すると、障害・福祉・災害等いろいろなボランティアの人達から「囲われボランティアだ、本来のボランティアじゃない」、特に国立の施設ですから、「大久保さんたちのボランティアはボランティアじゃない」、自分たちは「地域で這いつくばるようにやっているのだ」と言われました。それはそうかもしれませんが・・・。

確かに国立という冠がつくと、良し悪しは別としてある種のステータスみたいなものは生まれます。そこには非常に魅力的なもの、あるいは微妙なものがあると思います。

この C グループの「誰がボランティア活動を担い続けていくのか？」というサブテーマは、大変面白く思いました。私も行政の中で活動しましたが、それは契約という形でした。

これは自発的な自己申告とはいえ、ある種の契約ですから、それなりの責任が伴います。

もう一つは、施設でボランティアの自主活動として立ち上げたものがあります。

全国的な規模の研修会を20年ほど続けました。それは最初お話したように「予算なし」で始めました。予算は後からついてくるという考え方です。やろうという人が集まると知

恵も出るし、お金もなんとかなるだろう、という考えでやりました。だから止める時も誰にも相談することなくスッとやめることができ、「まさしくこれだ！」と思いました。これがもし誰かにお伺いを立てて始めたことで、あとのことも相談しなければならない場合、その違いは非常に微妙です。

今、全国津々浦々、行政はやはり市民の力を借りねばならない状況の中に来ています。行政の力、予算など色々含めて行政だけで地域を担っていくということは難しいでしょう。そこでボランティアは自分たちで何かやろうと施設などに登録するボランティアもいるし、自分たちで立ち上げることもあります。そのボランティアの種類が最初に申しあげたように、自分たちでクリエイティブにやっていくボランティアか、あるいはその場に「困った人がいたら助けましょう」と課題が見えている災害ボランティアなのかいろいろありますが、相手に対して責任を伴う活動はそれなりの覚悟が必要です。それは行政側の場合、ボランティア側の場合いろいろですが、それも活動を続けていくうちに徐々にボーダレスというか、協働という形になってきています。

どのサブテーマもそれぞれ深い意義を持っていると思いますが、その中で面白いと思った E グループの「私は役に立っているか？私はここにいていいのか？」です。私は邪魔になっているのではないかと、逆にあの人がいてもいなくても・・・なんか邪魔よね、こういう人結構いらっしゃいます。“ジョーカー”というか、“困った子ちゃん”という人もいます。

ある研修で、「ボランティア全員が役立っている」という講師がいました。その全員の中に「何にもしない人」がいてもそれはそれなりに役割があるのだ、と。黙って動きを見ている人も必要だし、それから何にもやらない人がいると、やっている人が「自分は役立っている」といういい気持ちになる。あるいは「あの人もやっていないのに、私たちはやっているのよ」ということで、逆の団結があったり、良くも悪くもお互いいろいろな役割をしていて刺激になっているのです。よく偏差値が70ぐらいの人ばかりのクラスは面白くないといいますが、ボランティアにはいろいろな人がいるので、そこに波風やら刺激を与え合って飽きが来ないという効果もあるのです。嫌になったらやめればいい、これがボランティアの一番大切なことの一つです。どんな人も役に立っているという事はもう皆さんよくご存知だと思いますが、「ここにいていいの？」、「いいのよ」と、皆さん言ってあげることで、その会の和やかな流れが生まれるのだらうと思います。

H グループの「マンネリに陥らないために、何をしたらいいか？」これもいいサブテーマだと思います。一言でいうならば、皆さん「晴（ハレ）と褻（ケ）」という言葉、ご存知でしょうか？ほとんど死語になっているような言葉ですが、昔の人の知恵です。晴れの日、お正月とか、お葬式も晴（ハレ）の日に入ります。昔、ほんとに物も何にもなかったときの普段の暮らしを褻（ケ）といい、例えば質素であり何にもないので普段着は一張羅、お正月とか晴々しい時は晴れ着をまとして日常に変化をつけたのです。晴れ着というのも晴（ハレ）の日に着たから晴れ着です。昔の人の「晴（ハレ）と褻（ケ）」この言葉はすごいと思います。お正月のご馳走ばかり食べていると飽きますね。マンネリになる。人間はこの「ハレとケ」というのが大事なのです。

ボランティア活動でいうならば、「だんだん何となくマンネリ化してきたなあ」と思ってい

る会は結構あるはずで、その時には「ハレ」を演出しなければなりません。一番手っ取り早いのは団体若しくは地域が抱えているテーマを話し合っ、イベントをやる方法があります。これは結構大変ですが、お互いがぶつかり合ったり協力する中で、一つのエネルギーが生まれてきます。この「晴（ハレ）と曇（ケ）の法則」を是非活用して下さい。ご馳走ばかり食べているとお茶漬けが欲しくなるでしょう、これも「ハレとケ」です。そうやって人間は変化をつける、ボランティア活動も変化をつけることはとても大切なことだと思います。

K グループの「定年はあるのか・・・？」このテーマが出てくるのが不思議に思います。本来、定年はあってはならないと私は考えます。ただ施設によっては定年制も必要ではないかということで、九州国立博物館や東京国立博物館等いろいろなところすでに取り入れています。公的なそういうメジャーな施設では定年制を導入することによって、いろいろな人に活動してもらう機会を与えるという考えで定年制を設けているところも結構でてきました。しかし定年制により“うまく文化が引き継がれていかない”という弊害も出ています。こういったことは、職員も施設側も新しい試みですからそこまで想像していなくて、課題も出てきたところがあります。ここはやっぱりボランティアも知恵を出して、ボランティアの文化を引き継いでいく何か工夫をしなければならないと思います。それにはこのフォーラムのように皆さんが集まる場でいろいろなヒントを出し合い、考え、検討していけばいいと思います。先ほど、こういうワークショップをすごく評価されている方がいましたが、私も本当にそうだと思います。いろいろな答えというか考えが沢山できてきて、それ聞いているだけですごく勉強になりました。

それから B グループの「世代交代や世代間コミュニケーション・・・？」に「よそ者の力を借りる」とありましたが全く同感です。いろいろな新しい見方ができるということはとても大切なことだと思います。同じ景色を見ている、あるいはいつも同じ状況下にあると、いつのまにか自分が気づかないうちにそれが当たり前になってしまいます。

これが洗脳です。

私の怖い実体験を一つ申し上げます。私たちは国立の施設で毎日々々その施設の中でいろいろな情報や景色を見聞きしていました。ある時、そこはかなりの広さで宿泊施設もあり客は大きな荷物を抱え宿泊して、帰るときは会館の売店から宅急便で自宅に荷物を送ることが一般的でした。

ある時、私たちが自主企画をボランティアでやった最後の朝、その日はたまたま休館日で、売店がお休みでした。そのうち参加者の一人が、売店が契約している宅急便とは違う宅急便の会社に来てくれるように電話をしたのです。そしたらこともあろうに、ずっと私と一緒に活動してきたボランティア仲間の一人ですが、私のところに血相を変え飛んできて「大久保さん、あの人達とんでもないことやってくれた」「いつも A 社の車しかこないのに B 社の車が入ってきたのよ」と。その慌てた彼女は、私と一番いろいろ議論をかわしてきた意識の高い仲間だったのでびっくりしました。売店がたまたま A 社と契約していたから、A 社の車しか来なかった、ところが他社の車が来たら、それは施設の契約外の宅急便の会社だ、違反行為だと彼女は思い込んでしまったわけです。

同じ景色ばかり見ていると、そういうふうに思い込んでしまうのです。だから同じところ

（施設）にずっといるということは怖い一面もあるなあと思いました。時々外の風にあたるとか、いろんな見方を変えるということはとても大事なことです。

もう一つ言うならば、今日はボランティアの声が沢山でしたが、行政や施設の職員の方が少なく、とても残念です。多くの行政の方に皆さんの声を聞いていただきたかったのですが。

その一つとして施設のボランティアとはどういう存在か、という事です。

もちろん会館の活動をサポートする、あるいは別の色・華を添えると言いますか、いろいろな活動がありますが、私はその中で一番大事なことは、『第三者の視点』『市民としての感性』だと思っています。施設の中でさわやかに風を吹かせる感覚、感性が大事だと思います。但し、強い風では職員も困ります。行政の職員としての感性、市民としての感性、今はもう少し便利な NPO など中間の感性もあります。いろいろな立ち位置の人がいることが、お互い刺激になり、学び合うことになると思うのです。職員だけが、行政だけがずっとやっているのではなく、多くの市民の視点を混じえながら同じ活動を協働で、助け合い支えあっていく、こういうことが活動の背景に流れていることがとても大事な視点だと思います。

ボランティアのみなさんも活動するだけではなく、行政の方といろいろ話し合うことがありますよね。その時には行政の方にも、「ああ市民の人たちは、こういう考えがあるのだ」ということを知って貰う。市民も「ああ行政の人も、いろいろと大変なのだ」と分かり合えることが大切なわけです。そういうことが分らないと、結局、税金がどう使われているかも全く分からないままで終わってしまうわけです。いろいろな活動は千差万別ですが、活動する中で世の中の仕組みというか、こういうものを体感していく……。それがこの文化活動の醍醐味というか一番大事なところですよ。もちろんいろいろと読み聞かせをすればその技術を覚える、友達もできる、いろいろなことがありますが一番大事なことはそういう感性をそだてるというか、それを忘れないことです。

私の資料の中で、ソーシャルキャピタルという言葉を書きました。生涯学習のソーシャルキャピタルです。ソーシャルキャピタルという言葉聞いたことありますか。あまり無いと思いますが、私もこの言葉を10年ぐらい前にあちこちで聞きましたが、当時はピンときませんでした。これは社会資本、社会関係資本とかそういう概念に関する事で、日本でも研究者がその概念を説明した本は何冊かあります。買って読みましたが、なんだか説明っぽくてピンときませんでした。でもここ数年前から私はそれの自分なりの答えを見つけました。それが生涯学習のソーシャルキャピタルです。学習していることがどれだけ社会に還元されていくか、ということです。

二つの例でお話しましょう。一つは、最近ですが私があるところで持っている講座で、受講生の一人の女性ですが、他の場所で同じ主婦同士6人で翻訳の仕事をしていたのです。「気候の文化史」というドイツ語の結構大変な本を3年がかりで翻訳したのです。私はそれをみてびっくりしました。内容的にも色々な図表とか何とか沢山でてきて、読むだけでも非常に難しい本です。ところがそれを翻訳の教室で学んだ主婦たちがやり遂げたのです。すごいことだと思いました。

もう一つの例は、昔出版社で同僚だった友達が、定年後江戸東京博物館（江戸博）友の

会会員になっていますが、そこで彼女は古文書の講習を受けました。古文書はやればやるほど奥が深くて難しいものです。江戸時代は火事が多くてその当時の資料は、かなり無くなっていたり散逸しているそうです。残った貴重な資料がありその中の江戸幕府の何年かの資料、それを彼女たちが翻刻・翻訳して活字で出版する、大変な作業です。最初、学芸員の人が「あなたたちチョットやってみない」とさりげなく言われたらしいです。ところがやりだすと難しい、難しいけれどそれを乗り越えていく面白さを知りました。最初の一年間は職員が色々サポートしてくれましたが、そのうちに職員もだんだん忙しくなって、これだけを一年でやってください、半年でやってくださいと、だんだん厳しくなってくるわけです。彼女や彼等20人ほどのメンバーは段々ノリに乗ってきて、来年1月には全巻完成するそうです。

このような話を聞いて思ったことですが、私自身もいろいろなことをやってきました。最初はまるっきり素人です。主婦ですね。でもいろいろなことが出来たのは、これはソーシャルキャピタルだと自分自身思ったのです。結局、仲間がいたから仲間同士で決め、信頼し合い支え合ってそれを具体的に実行していく、上から命令されたら反発しますが、自分たちで決めたこと、仲間同士の支え・約束というのは、意外に、「お金を貰った云々」とかではないのです。そういう仲間同士が認め合い支え合うことによって、自分たち一人一人が持っているもの以上のことが出来たのは、まさにソーシャルキャピタルだと思います。社会に還元される、ボランティアです。だから学習するということは一人の学習ももちろんそれはそれでいいのですが、仲間同士で学習していくことのメリットはさらに大きいと思います。

一緒に本を読む、その共感する喜びは何か、難しいことは教え合いながら進めていくという、これが人間関係、生涯学習のソーシャルキャピタル、日本語で言うと、例えば規範であるとか、人間関係であるとか、ネットワークっていう言葉で言われるらしいのですが、ボランティアの中にそれは全部ありますね。だから思いがけないことができる。ほんとに子供たちの遊びの相手でもなんでもいいのです。絵本の読み聞かせでもいい、仲間と一緒にやることによって思いがけない喜びと力が湧いてくるのが、この文化ボランティア活動だと思います。

文化ボランティア活動について河合元文化庁長官の講話のコピーと、私が書いた本のコピーを添えていますのでお役立ていただければ幸いです。

皆様、今後の活躍を期待いたします。